

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	松 浦 明 日 香
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
ドイツにおけるコルチャックの受容とその教育学化に関する研究			
論文審査担当者			
主 査 教 授 丸 山 恭 司			
審査委員 教 授 七木田 敦			
審査委員 教 授 山 田 浩 之			
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究は、子どもの人権擁護者として知られるヤヌシュ・コルチャック (Janusz Korczak, 1878 (1879)-1942) の思想と実践がもつ教育学的意義を明らかにするために、その教育学化を進めてきたドイツにおけるコルチャックの受容を批判的に検討するものである。</p> <p>コルチャックは、「子どもの人権」を唱えた人物として教育学においてもしばしば言及されるが、彼自身は教育学者ではなく、小児科医であり、児童文学作家であり、孤児院の院長であった。とはいえ、コルチャックに教育学的要素がないわけではなく、これを強調し、教育学化を通してコルチャックを積極的に受容してきたのがドイツの教育学者らであった。しかしながら、戦後ドイツにおけるコルチャックの教育学化の道りは決して単純なものではなかった。戦後初期のコルチャック受容は、ドイツ再生の文脈のなかで、過去を反省する新しいドイツを見せるという目的に強く影響されたものであり、ナチズムの償いとしてポーランドの英雄を称揚し、この動向のなかでコルチャックに教育学的要素が認められ賞賛された。その後、コルチャックの業績が教育学的に再構成されていく。本研究は、戦後ドイツの社会状況の変化を精査しつつ、ドイツにおけるコルチャック受容とコルチャックの教育学化の展開を批判的に検討し、コルチャック教育学の現状を確認することを目的とする。</p> <p>本論文は、9つの章から構成されている。</p> <p>まず、序章では、コルチャック受容の広がりや先行研究が整理され、問題の所在、研究の目的と方法が述べられた。</p> <p>続いて第1章では、コルチャックの生涯が概観され、医者、孤児院の院長、児童文学作家としての業績に加え、彼のドイツ体験が紹介された。次に、コルチャック受容の世界的動向が整理され、ドイツにおける受容の独自性が示された。</p> <p>第2章では、東西に分断されたドイツにおいてそれぞれどのようにコルチャックが受容されたのかをドイツ書籍出版協会平和賞が与えられた1972年を軸に整理した。</p> <p>第3章では、コルチャックの改革教育学的特徴を強調する研究のあることから、改革教育</p>			

学の観点からコルチャックならびにその受容を整理・検討した。彼自身は同時代の改革教育学運動に関わっていなかった一方、後の教育学者から多くの共通点を指摘されてきたこと、また、そうした指摘も 90 年代には少なくなることが明らかにされた。

第 4 章では、コルチャックの改革教育学的特徴を強調する研究と入れ替わるかたちで、その後展開する教育学研究に焦点を当てた。80 年代からは治療教育学や特殊教育学の文脈において話題にされ 90 年代以降は子ども研究において、2000 年代には幼児教育学や子どもホスピスを論じる文脈で語られることが多くなることが明らかにされた。

第 5 章では、コルチャックを道徳的英雄として見ることなく、その実践の教育学的意義を教育学理論として抽出したバイナーに焦点を当てた。バイナーは、コルチャックの三つの子どもの基本的な権利である「自由のマグナカルタ」の上位にコルチャックの「尊敬に対する子どもの権利」を位置づけ、そこからコルチャックの教育学、すなわち、「尊敬の教育学」を構想したのであった。

第 6 章では、続けて「尊敬」概念に着目し、コルチャック自身が用いたポーランド語の *szacunek* 概念と翻訳されたドイツ語の *Achtung* 概念の意味がその使用文脈において検討され、子どもの「人間の尊厳」との関わりにおいて精査された。

第 7 章では、以上の考察から、ドイツにおけるコルチャックの受容とその教育学化の特徴が精査された。まず非教育学的なコルチャックの受容のあり方、次に教育学的に解釈されたコルチャック受容のあり方、そして、教育学化されたコルチャック像が特徴づけられた。最後に、終章において、本研究の意義と課題が整理された。

本研究は次の 3 点において高く評価できる。すなわち、第一に、戦後ドイツにおいてコルチャックがどのように捉えられたのかを明らかにしたこと、第二に、教育学者でないコルチャックがどのようにして「教育学者コルチャック」となったのか、すなわち、コルチャックが教育学化されるなかでどのような点が注目され、その結果、どのような議論がなされたのかを明らかにしたこと、第三に、コルチャックの教育学化がドイツ教育学やドイツ社会とどのように影響し合い展開したのかを明らかにしたことである。本研究の限界として、コルチャック教育学の現在の到達点が、コルチャック研究として十分なものであるのか、また、教育学としての意義と限界がどこにあるのかについては十分に検討できていないことが挙げられる。その点を考慮しても、本研究が明らかにしたコルチャック受容とその教育学化の歴史的理論的成果は十分に学術的意義のあるものと判断される。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 6 年 2 月 1 4 日